

ロータリーを分かち合うために

その昨日を省み、今日を問い、明日を考える

コーディネーター
バスターガバナー

菊地 晤 (桐生南)

パネラー

バスターガバナー

蔵並 定男 (鎌倉)

バスターガバナー

浜田 耕一 (米沢)

バスターガバナー

大久保圭一郎 (熊本)

菊地 まず大久保先生に「ロータリーの成長」を主題としてお願いいたします。

大久保 主として人的増強拡大の経過についてということで、過去の拡大を省みながら、質と量の問題について述べてみたいと思います。結論から申し上げますと、量が質を落とすという概念からまず抜け出し、逆に量が質を高める基礎であるということもあっていきたい。ただ量の拡大が質の向上につながるためにはそれなりの配慮がいるわけで、一言で言いますと、その人がロータリーに向く人かどうかということです。ロータリーに向く人とは、まず第1に、クラブライフをエンジョイするための工夫をこらす人、第2に、ロータリーとはいろんな価値観、哲学、宗教に基づく、世界のあらゆる人たちが共通の綱領を掲げているといったひとつの理想ですから、どんなに社会的地位の高い人、あるいは経済的、政治的環境に追いまわられている人でも、ある瞬間理想に共鳴できる人、第3にロータリーの4つの奉仕を絶えず心がけていないと自ら後味の悪い人、それはロータリーに向く人です。地域社会で見落としている方の中にも、こういった素質のある人はいらっしゃるはずで、拡大と増強という点から、これ以上拡大すると質の問題とのジレンマに苦しむというような議論がよくなされますが、そろそろこの考え方からは脱脚すべきではないかと私は考えております。

菊地 次に、「ロータリーの発展と変遷」ということについて、浜田先生お願いします。

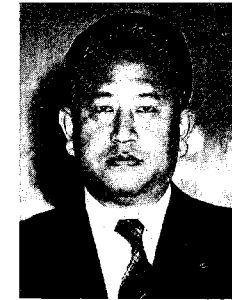
浜田 私は、歴史をたどれば、ロータリーの思想というものが浮き彫りになってくると思いますので、ロータリーの奉仕の理念というものがどういったふうに転換してきたか、それから、ロータリーの組織というものがどのような編成をもって今日まで来たか、この道筋を申し上げ

れば、これからわれわれがどのように考えていくかという一つの方向が見い出せるのではないかと思います。

まず奉仕の理念の変遷を大きく分けると、4つの段階があったと思います。1つはいわゆる創立期、1905年から1911年ぐらいまでの間で、当時は単なる会員の相互扶助という考え方が先行しておったと思います。そして、少しずつ奉仕というものに関心が深まってきたときに不幸な世界的事件が起きました。1914年からの第一次世界大戦、この時期が一つの転換期だと思います。その翌年の1915年に道徳律がサンフランシスコ大会で採択されております。

2年後にロシア革命が起り、いわゆる職業を重視するか、社会に対する奉仕を重視するかという問題が、ロータリーの中で大きく論争的になったわけでございます。その結果、第3番目の転換期を迎え、1923年、セントルイス大会におきまして、かの有名な23の34という決議案が採択になりました。その次の大きな転換期は、第二次世界大戦とその混乱を経て終戦を迎える1945年以降のロータリーの動きです。それが現在、いろんな試行錯誤を経まして、今日まで連続と続いているわれわれの奉仕に対する理念でございます。

私は、ロータリーは組織管理がりっぱにできており、それによって78年も続いてきたと思いますが、組織管理につきましては、この大きな変遷が3つに分けられると思います。最初の1905年から1915年まで、いわゆる標準定款をつくるまでの間を創世期と考えております。標準定款が確立するのは1922年6月12日で、この日以後の加盟クラブはすべてクラブ標準定款を採用することが義務づけられております。そして1927年には、現在の地区ガバナーを置いて地区制をとるという組織に変わってまいりました。



蔵並 定男君



浜田 耕一君



大久保圭一郎君



菊地 晤君

ところが1935年から45年まで、日本、ドイツ、イタリアにナショナリズムが台頭してまいります。この辺がロータリーにとって最も危機的な時代でございます。そして終戦になりまして、日本のロータリーが復帰するのが1949年です。

組織管理として最も優れた考え方としましては、一人一業、毎週例会を開くこと、役員その他が輪番制で1年で任期が満了すること、そして、ここで皆さんと一緒に考えなければならぬことは、R Iに、ロータリーが全部直結しなければならないという考え方です。残念ながらまだこれが実現いたしておりません。1983年3月の規定審議会で83の198という決議案が採択されましたが、近くその決議案に基づいて世界のロータリーが標準定款を採用するという時代が来ると思います。これは、そう遠くない将来に実現すると思います。そうやって初めてそれぞれのロータリークラブが、R Iに真実に直結するという形になるかと思えます。これを私どもも大いに期待しておるわけでございます。

菊地 「現在のロータリーとその問題点」について蔵並先生にお願いしたいと思います。

蔵並 特に日本のロータリーと世界のロータリー、これを考えますと、世界のロータリーを調整してつなぎ合わせている唯一の、そして最大のロープは、奉仕の理想でございます。これは綱領にはっきりとうたわれております。つまりロータリーにおきましては、皮膚の色、宗教、人種についてお互いに尊敬し合って差別をしないという根本理念でございます。元来、R I会長の毎年出されますテーマは綱領を推進する道具であるという見方をされております。世界中のロータリアンが、こういったテーマを十分に理解して実践していくならば、ロータリーの真の精神は生かされてまいらると思えます。

次に日本のロータリアンとして考えなければ

ならないことは、個々のロータリアン、個々のロータリークラブが、R Iとの距離をもっと近づけることだと思います。われわれがいま何を考えているか、何を望んでいるかを把握してもらい、そしてまたR Iがいまどんな実態であるかを知る機会というのはわりあい少ないのでございます。私はこのような大会を利用して、日本中の地区がR I理事に直接おいいただき、R Iの実情あるいは世界のロータリーについて伺うことができればよいと思えます。

菊地 この辺から「これからのロータリー、未来のロータリー」ということについて一言ずつお話しいただければ幸いと存じます。

大久保 いろんな社会奉仕プログラムがございしますが、そのプログラムにクラブの人が、ホストクラブになったつもりでみんなで取り組みれば、これは、地域社会に感動を引き起こすはずで、頼まなくともマスコミ、マスメディアで取り上げてくれる、本当の広報ができると考えております。

ロータリーは、クラブであるということ、楽しみましようということ、しかし反面、理想追求の集団であると、そしてまた、奉仕を心がける人の集団であると。この3つが、私のきょう申し上げたかった結論でございまして、最後に奉仕を心がけるといってもどういうふうにするのかと。みんなでそれに参加すること、こういったホストクラブをお引き受けになるというときに、本当にみんなが参加してひとつの奉仕をする一番いいチャンスだと思います。

浜田 奉仕という概念は、皆さん個人個人のお心の中にあると考えるわけです。みんなが同じような奉仕の理想といえますけれども、その奉仕の理想が同じタイプであったならば、これはお城の石垣をごらんになるとおわかりだと思いますが、大きな同じ形の石ばかり積み重ねて

しまったら、誠にもろいものでございます。小さな石もすき間に入れることによって、その石垣が非常に強いものになるのです。先ほど大久保PGのお話のなかで、クラブで奉仕をする意思のある方をほしいとおっしゃいましたけれども、このクラブの中に入ってしまうえば大なり小なり奉仕というものに関心をお持ちになるのではないかと思います。人口1億2千万の日本人のなかに、そう質の悪い方はいらっしゃるはずはないと。ですから私は、ますます拡大することがロータリーに活力を与えると考えerわけです。奉仕というものは、一面では非常に独善的なものでございます。その辺も、これからの奉仕を考える場合に大切な問題だと思ひます。

いまわれわれ社会は大変な平和を享受しております。自由も繁栄も享受しております。しかしながら、われわれに欠けているのは何であろうか。それは哲学です。私は、ロータリーが今後、これはロータリーに限らずわれわれの社会が今後望むことは、公平な社会、いわゆるフェアな社会、平等ではなく公平です。こういう社会を、私どもは理想としていかなければならないと思ひます。

蔵並 9月中旬の、私どもの地区大会で、一昨年の京都大会での「ロータリーはこれでよいか」という主題のアンケート結果が発表されました。これによると、大多数の人が「これではいけない」ということでした。また、ロータリーは楽しくない、重荷に感じている、退会したいと考えたことがある、けれども、ロータリアンである誇りは持っている。だから子供はロータリーへ入れたいと、ちょっと矛盾しておりますが、ロータリーの尊厳は認めておるようです。

私どもは、ロータリアンとしての誇りはみんな持っているはずで、それだけに、ロータリーが重荷にならないように、楽しい場であるように、それぞれが努力、工夫してロータリーを育てていく必要があります。ここで大切なことは、その国、地域、地区、あるいはクラブの特殊性を生かすと申しますか、それに適合した育て方ではないかと思っております。

7月中旬に、東京で、RIの会員増強セミナーがございましたが、ここでも問題点が二、三

でございました。第1が、ロータリーの正しい姿を地域に浸透させる努力をしないではいけません。地域のロータリーに対する理解こそ、会員増強、ひいては世界のロータリーの発展にもつながる重要な問題である。すなわち、ロータリーの正しい広報であります。

第2が、若い人たちがロータリーへの入会をためらっているとしたら、その原因を追究する必要があります。このことは、私どもの側で高い垣根をつくり過ぎているのではないだろうか。若者たちにロータリーへの道を開かなければロータリーは枯れてしまうぞと、いう人もいます。若者たちにとってロータリーは魅力のあるものでなければなりません。老、壮、青がともに尊敬し合う姿、これがロータリー本来の姿です。もし調和のとれない場合には、若い会員だけのアドレシナルクラブをつくるように努力したらどうかとの声もありました。

私どものロータリークラブというのは、その区域はそのクラブの定款にちゃんと定められております。これが地域意識、そしてまたそれぞれのクラブの自主性、秩序を保ってロータリークラブが健全に発展している重要な要素であります。しかし現在では、ロータリーは国連と同じように、世界の平和、人類の救済を前面に打ち立てている時代に入っているから、こういう従来の地域に対する固定観念というのは捨てていかなければならぬという考え方もでてきました。申すまでもなく、地域意識と全世界的意識の見解の相違です。封建時代、あるいは宗教戦争を経験したヨーロッパや日本と、これらを経験しない国、また、開拓移民であるとか、就職、転勤の激しい国とは同列には考えられません。この地域意識と全世界意識の接点にいまのロータリーは立っているわけです。これがいかに解け合うかがこれからのロータリーの地域拡大、発展にも大きく影響してまいるものと思ひます。このヨーロッパ諸国の考え方も時代とともに変わってくると思ひますが、一方、人間至るところ青山ありとする考え方とのこのずれ、これは今後、全世界のロータリアンが努力して解決していかなければならぬと思っております。

菊地 どうもありがとうございました。